

# すすむし

Vol. 7 No. 2



倉敷昆虫同好会

AUG. 1957

# 目 次

表紙デザイン	友野良一	
シルヴィアシジミの分布とその食草について考えること	安江安宣	1
阿哲袂のニシキケンカメムシについて	風早保男	11
おとしぶみ		
タイリクアカネについて	安東瑞夫	11
和気でゲンバイトンボの棲息を確認	友野良一	12
高梁市でアオサナエ	友野良一	12
オグマサナエの大量羽化	友野良一	12
倉敷にゴイシシジミ	尾崎年彦	12
釜溪からトラフシジミ	風早保男	13
アオバセセリ金山にて捕獲	大森豊彦	13
和気のオオウラギンヒョウモンとウラゴマダラシジミ	友野良一	13
本年のハルゼミの初鳴	小野洋	13
金山のツマグロヒメコメツキモドキ	小野洋	13
高滝山附近採集記	菅野孝昭	15
続高滝山附近採集記	菅野孝昭	17
採集メモ		
1. 金甲山 2. 高梁市狐谷 3. 高滝山附近	友野良一	19
採集メモ		
1. 佐与谷大久保峠 2. 真賀. 神庭間		
3. 神庭の滝 4. 兵坂峠 5. 西草間	菅野孝昭	21
昭和町日羽, 美袋間の調査報告及び高滝山附近の採集品目録	若林正史	23
"冬眠中の夢"	水野弘造	24
私の現在	船越俊平	25
会報		25
編集後記		26

## シルヴィアシジミの分布と

## その食草について考えること

安 江 安 宣

## I. この蝶の地理的分布について

シルヴィアシジミ *Zizina otis emelina* は我国においては永くヤマトシジミと混同されていたが、1922年に中原(1)が兵庫県佐用郡久崎町産の標本にもとついて *Zizera sylvia* として記載し、ついで1941年に成富(2)が岡山市在住の知友(伊藤芳明)から譲られた所謂ヤマトシジミ数匹のうちより中原のいう新種に該当するものを発見、これに対してはじめてシルヴィアシジミの新称をつけ本種再発見の端緒をあたえた。この標本は実にその前年8月に伊藤によって岡山市国富の当時第六高等学校内において採集された1♀であった。本種の学名についてはこれ以後九州大学の白水(3, 4, 5), 江崎(6)等によって綿密な考証がなされた結果、現在のところ江崎は本種の日本産のものに対しては *Zizina otis emelina* (del' ORZA, 1869) とするのが適当であると結論している。よって筆者も学名についてはこれに従うことにする。

さて1956年7月下旬、筆者は多年手がけてきたマダラテントウ類調査のため隠岐群島の島後に渡航、同月27日に同島のはゞ中央に位置し横尾山の中腹にある島根県周吉郡旧中桑(ナカスジ)村宇都万目(ツマメ 標高約180m, 北緯約36度15分)においてシルヴィアシジミ(白水同定)を1匹採集することができた。これは同島産の標本としては初記録である。隠岐群島の蝶類についてはこれより丁度50年前の1906年8月、三宅恒方が採集旅行をして、翌年には隠岐島産鱗翅類目録(7)を発表し蝶類43種、蛾類136種をあげた。この報告のなかで蝶之部36番目に *Zizera maha* KOLL. (Yamato-shijimi)の種名がみられるが、後年白水(4)によってシルヴィアシジミとして再確認された *Lycaena alope* FENTON, 1881(8)なる学名もこゝではヤマトシジミのシノニムとして併記されている。三宅によるとヤマトシジミは同群島の島々を通じて“very common in all islands”とある。こゝで筆者の思うことはこのようにごく普通にみられるヤマトシジミのなかに、今日でいうシルヴィアシジミが当時既に混在していたかどうか、又昆虫学者として命名高かった三宅がこのことに気付いていたかどうかの問題である。明治38, 9年頃本種が同島に産したか否かを論ずるにはまず先決条件としてこの蝶の食草が既に生育していたことがわかっていなければならない。幸運にも本邦植物学者による同島の植物調査は明治中期から着手されており、明治22年堀正太郎、同31年三宅驥一、同40年徳淵永治郎の採集がおこなわれ、これを総計すれば同島産植物は明治後期において約750種が判明していた。いま徳淵の総合報告(9)である「隠岐島植物分布論」をみると明らかにシルヴィアシジミの食草であるミヤコグサの学名が記されていて島前、島後に産することがおべてある。

これで食餌植物の分布の有無については片づいたのであるが、第2の件すなわち当時隠岐島のヤマ

トシジミのなかに今日のシルヴィアシジミが混在していたことに三宅が気付いたかどうか当時の彼の採集品を再検討すればわけではないが筆者はその所在を関知しない。けれども三宅は所謂ヤマトシジミと称されていた1群のなかに別型のあることについては彼は既に知っていたのである。それは彼が隠岐島を訪れる直前、台湾に採集旅行をしてその業績は明治39年に「台湾産蝶類図説」(10)として発表している。この報告のなかで今日シルヴィアシジミの別亜種とされているタイワンコシジミ *Zizina otis riukiensis* の記載をおこなっているので参考のために再録してみることにする。

『タイワンコシジミ(新称) *Zizera sangra* MOORE. 翅の有様ヤマトシジミの如し。前後翅とも紫青色を呈し周縁黒褐色なり。裏面は帯褐灰色にして、紋点の有様ヤマトシジミの如し。唯本種の特質とするところはヤマトシジミに比して遙かに小なるを、中室中央に点紋を欠くことにより一見して区別し得。翅の拡張7分内外。産地苗栗(9月)』

これによってわかるように三宅は隠岐島へ渡航以前にすでにタイワンコシジミを自身で採集しているくらいであるから、そのあとで隠岐でとったヤマトシジミの標本のなかに若し今日でいうシルヴィアシジミがまざっていたならば、必らずこれを何らかの形式で弁別したであろうことは想像に難くない。したがって彼の同島産採集品を筆者は未見であるが、*Zizina otis emelina* を未採集であったことはほとんど間違いないと考えるわけである。

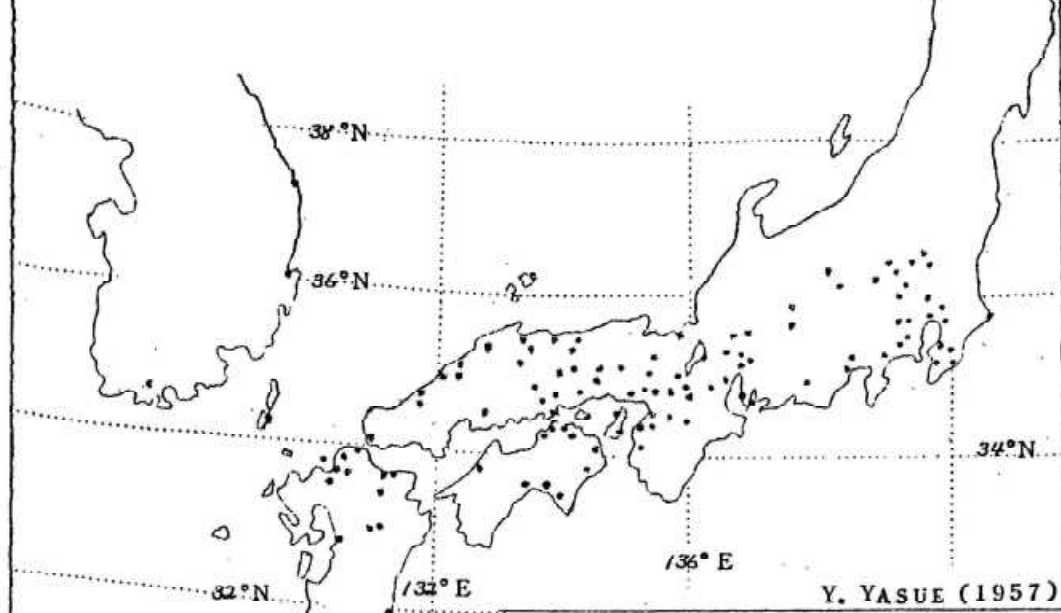
つぎにこの蝶の本州日本海沿岸地方における今日までの既知産地をあげると島根県益田市、浜田市、鳥取県米子市、大山山麓、倉吉市上井、鳥取市、京都府福知山市、福井県小浜市などにすぎず、このうち分布北限は鳥取市附で北緯約35度30分であったから、筆者の採集した隠岐島の産地は現在のところ異日本における本種の分布最北限となるわけである。因みに我国全土にわたっての最北限はいまのところ田中(11)によれば栃木県塩谷郡船生村佐貫(北緯約36度43分)であり、こゝはかつてM. Fentonが1878年に宇都宮市郊外阿久津村在の鬼怒川の河原で採集した地点より約20軒上流にあたる場所である。

こゝに興味のあることは筆者が目下分布調査を行っている昆虫で本種と同様東洋系の種類であるニジュウヤホシテントウ *Epilachna sparsa* HERBST の異日本における最北限はやはり隠岐島後北端の部落であることが筆者により同時に判明した。そしてこの害虫の本州における分布最北限もシルヴィアシジミのそれと奇しくも略一致しており、栃木県塩谷郡矢板町で佐貫の東北方わずか12軒の地点である。

いまシルヴィアシジミの我国における既知産地を文献によって調査してみると総計約180箇所がわかっているが、これを府県別にすると別表のとおりとなり、この資料にもとづいて日本地図のうえにこれらの地点をプロットし、本種の分布図をつくってみると第1図がえられる。これをみると本種の本州における分布地域はおよそ北緯36度以南にあることがわかるが、内陸部ではこれより若干北進して北緯37度線にちかく、一方本州の東西両海岸においては逆に36度線よりやや南方においてその北進が阻ばれている。これを具体的にいえば東岸では茨城県以北、西岸では石川県以北の諸県がいまのところ未記録におわっている。これら分布をみない地域については採集調査不十分の懸念も当然いだかれると思うが、幸いにして前者の地方では広瀬、藤村、後者においては小坂、山本の諸子

第 1 図

日本におけるシルヴィアジミの地理的分布



Y. YASUE (1957)

第 2 図

コマツナギの分布密度



記 号	
	密度 多 (4)
	中 (3)
	少 (2)

笠原氏 (1951) 資料より作図

の如き熱心な同好家の精しい探索の結果をまっても尚かつ今日まで発見されていないのである。

さきに本種は本州の内陸部においては海岸地帯より深く北進しているとのべたが、この分布状態は本種のような比較的発生期間のながい東洋系昆虫の例としては極めて特異な現象といわねばならない。すなわち、これを脇(12)の説を借りていうと氏の所謂東洋系蝶類の等種類帯のうち等5または等6種類数帯の北限線がしめすように本州中部以北においては北東に向って著しい凹型とならなければならない筈である。そしてこの分布型はひとり蝶類だけでなく動物、植物を通じてみた日本における生態学的生物地理学の多くの業績にもとづく確固たる事実といふことができる。

してみると本州中央部近傍におけるシルヴィアシジミの地理的分布帯のしめしている特異性はいかなる原因によっているものであろうかということが当然問題となってくるのである。こゝで注意しなければならないのは第1図にあらわされている地理的分布の粗密の度合はいまのところでは必ずしも棲息密度の多少をしめすものではない。それは本種の研究が各地でやられるようになってから比較的時日が浅いために、未調査の地域が国内に可成り残っているからである。それ故筆者はかつて森本・

(13) がのべた言葉をこゝに引用しておこう、『偶産種の南方系のは虫屋の密度の高いところで比較的良好に発見されるのではないだろうか』。もつとも山梨県の場合、同県シジミチオウ目録(14)にも本種が見当らないでポケット状の空白地帯となっていることは甲府盆地の地勢が浅いしているのだろうか？ なお隠岐島のシルヴィアシジミについては筆者は別に予報(15)しておいた。

## II. その食草の地理的分布について

さて次には食草との関係について眼を展じてみよう。現在のところシルヴィアシジミの幼虫が生育完了する食飼植物は次の2種のマメ科植物が知られている。

### 1. ミヤコグサ (3, 16)

*Lotus corniculatus japonicus*, RECEL.

### 2. コマツナギ (17)

*Indigofera pseudo-tinctoria*, MATSUM.

このなかで最もよく調べが行届いているのはミヤコグサであって事実筆者の居住する中国地方においても両者の生育地は全く一致しており、ミヤコグサの生えているところであればシルヴィアシジミはみられない。ミヤコグサの分布は小地域に限ってみればその生育地は可成り局在性であってどこにでもみられるという雑草ではないが、これを全国的にみると第1表のとおり北は北海道から台湾まで分布は普遍的であるといえる。

第1表 シルヴィアシジミの食草の分布範囲

食 草	東亜における分布地域
1. ミヤコグサ	北海道、本州、四国、九州、琉球、台湾
2. コマツナギ	本州中部以西、九州、中支那

資料 大井次三郎(1953):日本植物誌, 村越三千男(1934):内外植物原色大図鑑第6巻, 牧野富太郎, 根本 爾(1931):日本植物総覧に依る。

\*このほかにシロハギ(18, 19)を食する記録があるが、いま学名が不明なので今回は保留しておく。

コマツナギはこの表によると本州中部以西ということになっているが東北地方にも分布しており、たとえば「山形県植物誌」(20)をみても分布度は普通となっているくらいである。これに関連して注目すべき研究があるのでここに紹介すると、大原農研の笠原助教授(21)は我国における水田、畑地、荒地にみられる雑草の地理的分布を定性的のみならず発生密度の多少について量的にくわしく調査を行った。いまシルヴィアシジミの食草となる分だけを抜粋してみると第2表に示すとおりとなる。

第2表 日本及朝鮮におけるシルヴィアシジミの食草の分布密度

地方別 食草名	北海道	三陸	両羽	北陸	東山	東海	山陰	瀬戸内	北九州	南海	中鮮	南鮮
ミヤコグサ	4	4	4	2	3	4	4	3	3	3	2	3
コマツナギ	0	2	2	2	3	4	4	4	4	4	2	4

備考 表中数字の意義 5…多数発生する, 4…稍多く発生する, 3…少数だが広く認められる, 2…点々と少数発生する, 1…極めて稀に発生する, 0…発生が認められない

〔笠原(1951)の資料による, 但し朝鮮の分は同氏の1942年調査済未発表資料による〕

これで見るとミヤコグサはシルヴィアシジミの棲息しない東北日本においてむしろ優性であるに反して、コマツナギは西南日本において優性であり、両者の食草の分布密度は全く対照的であることがわかる。第2表にもとづいてコマツナギの分布図を第2図のように作ってみて、これと第1図のシルヴィアシジミの分布図とを比較すれば両者の分布範囲が偶然か否か断定はできないにしても余りにも見事に一致してくるのに驚くであろう。

ここにいたって想出されるのはさきに氷室(17)が愛知県下においてコマツナギがこの蝶の食草となることをつきとめた際、春季はこの幼虫はミヤコグサを喰べて育ち、秋季はコマツナギで世代を完了することを指摘したことである。若しこのことが確実であるならば、第2図の結果と相俟って当然東山地方のような山岳地帯では生育期間の比較的短い草本のミヤコグサよりもコマツナギが主食草となっているのではないかの疑問がいだかれるわけである。北沢(22)によると松本平にはコマツナギ群生の多いことを報じているが、この地域にはシルヴィアシジミの棲息が確認されているのである(附表参照)。但し北沢によればコマツナギは北方性の植物であると記していることは第1, 2表にあげた結果からみて間違いないように考えられるし、Bailey(23)をひいてみてもコマツナギ属 *Indigofera* は元來熱帯産の植物である。もっとも今の段階では食草の種類の調査が不十分であるから、いずれの雑草を主に食餌とするかを決定することは早計であるかも知れない。たとえば橋田(24)の報告をみると鹿児島県志布志村におけるシルヴィアシジミの多産地はミヤコグサは全然みられないとのことである。シルヴィアシジミの原種である *Zizina otis otis* は印度の Calcutta ではマメ科植物のササハギ *Alysicarpus vaginalis* で飼育できると LeRoy(25)はのべており、また Hopkins(26)によれば南太平洋諸島の Samoa 島においてはナンベンコマツナギ *Indigofera*

Anil や内地のヌスビトハギに近縁のナハキハギ *Desmodium umbellatum* の上で *Zizera labradus* (= *Zizina otis*) の幼虫が常にみられると書いてある。この両種のマメ科植物はいずれもタイワンコシジミを産する琉球、台湾にも自生し、特に前者は靉苔と称して染料原料作物として台湾で栽培されているとのことであるから、タイワンコシジミは彼島では農業害虫となる可能性もあるわけである。また上記のヌスビトハギ属 *Desmodium* の灌木はこの蝶がみられるマレー地方では田畑の雑草としても知られている (27)。

筆者はコマツナギについてあまりこだわりすぎたように思われるが、この順序でこれを食草とするシジミチョウには今ひとつミヤマシジミ *Lycaeides argyrognomon praeterinsularis* (19) があるが、これは本州中部地方の山地が主発生地域となっており、また分布北限はシルヴィアシジミよりもやや北方まで範囲が拡がっていて東北地方の中部まで進出しているが、西南日本には逆にごく稀れであるといわれている。

### III. 要 約

ながくヤマトシジミと混同されていたシルヴィアシジミ *Zizina otis emelina* (de L'ORZA, 1869) の本邦における地理的分布は岡山市産標本にもとづく成富 (1941) の再発見以来、急速に判明してきて現在までに国内でおよそ 180ヶ所の産地が知られており、大体関東以西北緯 36°線以南の西南日本にひろく分布しているものとみてよい。本種の分布最北限はいまのところ宇都宮北北西にあたる栃木県塩谷郡佐貫 (約 36°43'N) であるが本州の東西両海岸地帯ではその北限が 36°N より若干南方よりで北進が阻まれていて、東岸では茨城県、西岸では石川県以北は現在未記録に変わっている。

つぎに本種の生育を完了しうる食草についてはいまのところマメ科のミヤコグサ *Lotus corniculatus* var. *japonicus* とコマツナギ *Indigofera pseudo-tinctoria* の 2 植物がわかっているが、両者の国内における分布をみると、以前から知られているミヤコグサのそれよりもコマツナギの分布と略合致することに気がついた。本州中央部附近でしめされている此のシジミチョウの地理的分布の状態が食草の制約をうけているものか、あるいは気候とくに気温に支配された結果であるかはいまのところ連断しかねるが、東洋系昆虫の分布型としては極めて特異的であることが注目される。

終りに本稿を草するにあたっては多数の方々のお世話になったが、とくに隠岐島のシルヴィアシジミ同定の労をどられ種々の有益な教示を与えられた九州大学白水隆氏、並に未発表の貴重な資料まで快く提供された大原農研笠原安夫氏に謝意を表すると共に、種々御教示下さった青野孝昭、伊藤芳明、後藤宏、広瀬義躬、平田信夫、伊藤定雄、布藤英之、小泉憲治、小阪敏、氷室徹、森澄泰文、増田耕作、小野洋、岡田雅裕、沢野十蔵、柴谷篤弘、竹内吉蔵、友野良一、中村慎吾、田中正、田中亮三、三好和雄、保田淑郎、山本順子の諸子に御礼申上げる次第である。なお本文の要旨は日本昆虫学会中国支部第 5 回例会 (於山口大学農学部, VI-17, 1957) において発表した。



## 引用文献

- (1) Nakahara, W. (1922) : Two new species of Far Eastern Rhopalocera. *Entomologist*, vol. 55, 123 ~ 124.
- (2) 成富安信 (1941) : 蝶類雜記. *Zephyrus*, vol. 9, 112 ~ 116.
- (3) 白水 隆 (1943) : 九州産シジミテフ科の數種に就いて. *Zephyrus*, vol. 9, 194 ~ 198.
- (4) ——— (1950) : 日本産シルヴィアシジミの古記録とその亜種名. *昆虫学評論*, vol. 5, 22 ~ 26.
- (5) ——— (1951) : 日本産シルヴィアシジミの亜種名. *蝶と蛾*, vol. 2, 13.
- (6) 江崎悌三 (1955) : 日本蝶類の覚書(5), シルヴィアシジミの学名. *昆虫*, vol. 23, 83 ~ 86.
- (7) Miyake, T. (1907) : An annotated list of the Lepidoptera of Oki. *Ann. Zool. Japon.*, vol. 6, 163 ~ 217.
- (8) Butler, A. G. and M. Fenton (1881) : On butterfly flies from Japan with which are incorporated notes and descriptions of new species by M. Fenton. *Proc. Zool. Soc. London*, 1881, 846 ~ 856.
- (9) 徳淵永治郎 (1911) : 隠岐島植物分布論. 宮部博士就職25年祝賀記念植物学雜説, 283 ~ 338.
- (10) 三宅恆方 (1906) : 台湾産蝶類図説. *動物学雑誌*, vol. 18, 113 ~ 125. 附オ4 図版オ5 図♀.
- (11) 田中 正 (1956) : 栃木県産蝶解説, *インセクト* (栃木), vol. 7, (3/4), 54 ~ 55.
- (12) 脇 利允 (1952) : 日本本土における東洋系統蝶類の分布に関する一考察. *ニューエントモロジスト*, vol. 2, 53 ~ 67.
- (13) 森本 桂 (1956) : 蝶について. *昆虫科学* (徳島), No. 2, 36.
- (14) 三枝豊平 (1956) : 山梨県のシジミチョウ科について(1). *Insect Magazine* (東京), No. 37, 20 ~ 28.
- (15) 安江安宣 (1957) : 隠岐島のシルヴィアシジミ. *昆虫*, vol. 25, No. 3 印刷中.
- (16) 白水 隆 (1943) : 蝶の生活史. *宝塚昆虫館報*, No. 36, 40 ~ 41.
- (17) 米室 徹 (1954) : 愛知県八開村のシルヴィアシジミの生態. *新昆虫*, vol. 7, No. 2, 41 ~ 42.
- (18) 保田淑郎 (1949) : 生態メモ. *樺昆虫同好会々報*, vol. 1, No. 1, 19.
- (19) 江崎悌三, 白水 隆 (1951) : 日本の蝶 (新昆虫増刊号), 51 ~ 52, 102 ~ 103.
- (20) 結城嘉美 (1934) : *山形県植物誌*, 47.
- (21) 笠原安夫 (1951) : 本邦雜草の種類及地理的分布の研究オ3報. 畑地雜草の地理的分布と發生度. *農学研究*, vol. 37, 71 ~ 106.
- (22) 北沢右三 (1943) : 日本内地の陸棲生物地理学主に分布帯の研究. *上海自然科学研究所彙報*, vol. 13, 227 ~ 250.
- (23) Bailey, L. H. (1922) : *The Standard cyclopedia of Horti-Culture*, vol. 3, 1645 ~ 1647.

(24) 福田晴夫 (1956) : 鹿児島県の蝶. *Satsuma*, vol. 5, No. 3, 55.

(25) Lefroy, H. M. (1909) : *Indian Insect Life*, 786pp.

(26) Hopkins, G. H. E. (1927) : *Butterflies of Samoa and some neighbouring island-groups*.  
*Insect of Samoa, Part 3, Fasc. 1, 44pp. (60~61).*

(27) Richards, P. W. (1952) : *The tropical rain forest*, 393.

附表 日本におけるシルヴィアシジミの産地表(1957)

安江安宣編

県別	産地	文 献	県別	産地	文 献
関東地方			東 京	都内中川群	小山 (1957)
栃 木	塩谷郡阿久津村 (鬼怒川群)	Fenton (1881)		都内多摩川群	中村, 小林 (1950)
	"    船生村佐貫 (鬼怒川群)	田中, 阿久津 (1956)		註 茨城県下記産地なし	
	宇都宮市 (鬼怒川群)	"	中部地方		
	佐野市黒持	"	長 野	上田市	磐瀬 (1927)
	足利市川俣 (御油川群)	"		埴科郡千曲川群	栗林田 (1954)
群 馬	佐波郡島村 (利根川群)	石黒 (1951)		東筑摩郡洗馬村太田 (奈良井川群)	白木 (1951)
	多野郡瀧岡町 (神流川群)	矢野 (1953)		東筑摩郡塩尻町	磐瀬 (1952)
	"    神流村 (神流川群)	"	静 岡	富士郡富士町 (富士川群)	佐野, 伊藤 (1951)
	"    新町 (神流川群)	藤田 (1951)		磐田郡御油村 (御油川群)	百合山 (1955)
	神水郡松井田町	石黒 (1951)		富士官市 (潤川群)	上滝 (1950)
	前橋市	磐瀬 (1952)	愛 知	中島郡祖父江町	安藤, 高橋 (1953)
	高崎市	"		"    長岡村	"
埼 玉	児玉郡仁手村 (利根川群)	石黒 (1951)		西春日井郡新川町	久保田 (1955)
	"    旭村 (利根川群)	"		海部郡八開村	氷室 (1953)
	北足立郡篠原村 (荒川群)	矢野 (1953)		"    立田村	安藤, 高橋
	浦和市	"		"    弥富町	
千 葉	安房郡鴨川町	小原 (1943)		知多郡津島町, 河原町	木村 (1954)
	君津郡上総町	成瀬, 枝 (1957)		津島市	氷室 (1953)
	"    湊町	原 (1943)		名古屋地区 (庄内川群)	各務 (1952)
	海上郡銚子村犬吠崎	枝 (1954)	福 井	小浜市下根来, 鬼ヶ谷	井崎 (1956)
	野田市岩名	志賀 (1953)	岐 阜	岐阜市金鷲山 (長良川群)	長良, 高枝 (1956)
	木更津市	矢野 (1953)		大垣市木戸町	守屋 (1946)
	松戸市	"		養老郡養老村	伊奈木 (1951)
	市川市国府台	磐瀬 (1952)		海津郡城山村	守屋 (1945)
神奈川	三浦郡三崎町城ヶ島	枝 (1954)		註 山形, 新潟, 富山, 石	
	愛甲郡厚木町 (相模川群)	矢野 (1953)		川各県下記産地なし	
	"    黒島山狹野村谷戸	諏訪 (1949)	近畿地方		
	足柄上郡松田町 (箱根川群)	" (1955)	三 重	三重郡菟野町湯ノ山	則竹 (1951)
東 京	南多摩郡日野町	堤 (1952)		桑名市 (町屋川群)	今村 (1954)
	八玉子市	内山 (1950)	滋 賀	彦根市武奈	布藤 (1952)

県別	産地	文献	県別	産地	文献
京都	相楽郡木津町	吉阪 (1954)	岡山	英田郡江見町藤生	安東 (1953)
	綴喜郡田辺町	箕浦, 井上 (1955)		英作町豊国原	"
	福知山市(由良川畔)	吉井 (1953)		勝田郡勝田町真加部	"
奈良	京都市伏見区中島島(近山畔)	箕浦, 井上 (1955)	児島郡郷内村	安東 (1953)	
	奈良市春日山, 市之井	中川 (1950)	和氣郡備前町岡谷新田	古市 (1953)	
大阪	三島郡富田町	宮本 (1954)	賀茂郡西条町	安江 (1957)	
	豊能郡吉川村	栗原 (1943)	鳥取	藤原 (1953)	
	南河内郡大交野, 上の太子	若林 (1949)	鳥取市(千代川畔)	小林, 坂谷 (1951)	
	山田村竹内峠 (二上山麓)	保田 (1949)	米子市	中村 (1955)	
	富田林町	吉阪 (1953)	気高郡大正村	平田 (1956)	
	泉北郡磯部, 泉ヶ丘町田園	保田 (1957)	岩美郡面影村	中村 (1951)	
	泉南郡淡輪村	吉阪 (1953)	八頭郡河原町靈石山	山本 (1951)	
	堺市上之芝	"	東伯郡上井町	三沢 (1954)	
	高槻市	栗原 (1943)	矢追村関金	伊藤 (1951)	
	佐用郡久崎町	中原 (1922)	西伯郡赤松村	岡垣 (1945)	
兵庫	津名郡洲本町, 安平村	吉阪, 田中 (1952)	大山寺村	平林 (1942)	
	中川原村	堀田 (1957)	日野郡溝口町	栗原 (1943)	
	富島町	堀田 (1957)	石見村	西村 (1952)	
	神崎郡新原	越智 (1952)	出雲市今市町	西村 (1950)	
	氷上郡黒井町小山	武田 (1951)	浜田市三階山	" (1952)	
	朝来郡生野町	越智 (1952)	益田市中西	平田 (1956)	
	宍粟郡	武田 (1951)	那賀郡有福村	岡田 (1951)	
	川辺郡笹部	松井 (1952)	踪市村	"	
	東谷村	中群 (1950)	周吉郡西郷町都万目	安江 (1956)	
	尼崎市園田	吉阪 (1953)	下関市鞍羅木, 大葉山	森永 (1943)	
和歌山	神戸市兵庫区山の街	中山, 中島 (1952)	山口	山口地方	
	海南郡石山麓, 藤白峠	中群 (1950)	香川	木田郡平井町	脇 (1942)
	日高郡, 西牟婁郡の海岸地帯	後藤 (1957)	前田村	" (1943)	
中国地方	岡山市国富(六高校内)	"	香川郡仏生山町平池	横井 (1953)	
	津島(岡大構内)	伊藤 (1940)	郷東川畔	"	
	倉敷市水島	小野 (1951)	女木島	脇 (1942)	
	西大寺町(千山(吉井川畔))	船越 (1953)	綾歌郡白鉢山麓	"	
	総社市門田	船越 (1953)	三豊郡詫間町海岸	"	
	御津郡馬屋下村	赤枝 (1954)	高松市宮脇町	横井 (1953)	
	建部村	水野 (1951)	屋島, 西方寺	"	
	都窪郡山手村平山	安東 (1953)	徳島	海部郡那佐湾	西岡 (1956)
	清音村黒田	青野 (1957)	松山市内立花駅前	永井 (1912)	
	英田郡檜原村沢	友野 (1956)	杉立, 高細山麓,	林 (1950)	
栗井村志越峠	白神 (1951)	橋河原, 川上村等	松山爬虫同好会 (1954)		
	安東 (1953)	高知	高知市	脇 (1942)	
	"	香美郡川町(物部川畔)	"		

県別	産地	文献	県別	産地	文献
高知	香美郡吉川村 (物部川口)	脇 (1942)	大分	宇佐郡天津津村上庄	木部 (1943)
	安芸郡奈半利町	■		下毛郡耶馬溪村	白水 (1943)
九州地方			宮崎	宮崎市下北方	■
福岡	福岡市平尾浄水地	脇 (1921)		宮崎市内	湯田 (1950)
	■ 能古島	山本 (1956)	長崎	対島	浦田 (1954)
	糟屋郡香椎町	堀 (1930)	鹿児島	のお郡志布志町安楽	福田 (1951)
	■ 立花山	江崎等 (1931)		■ 西志布志村蓬原	■ (1956)
	■ 犬鳴山麓	白水 (1942)		■ 有明管内、枇榔島	■ (1956)
	■ 若杉山	岡部 (1929)		肝属郡佐多町	朝比奈 (1953)
	筑紫郡脇山村	白水, 林 (1942)		川辺郡坊ノ津村久志	福田 (1955)
	戸畑市中原 (九州大橋内)	林 (1942)		■ 山川町	岩淵 (1955)
	豊川流域鷲峰山	上田 (1956)		熊毛郡種子島西之表町	溝口 (1956)
	筑上郡南吉富村盾原	■			新川 (1951)
熊本	阿蘇郡久木野村	木部 (1947)	註 佐賀県、及九州本土の長 島県下には記録なし。また トカラ海峡以南の島々の記 録は都合により除外する。		
	■ 南郷谷夜峰山麓	田 (1956)			
	■ 中松村	■			
	熊本市内(坪井川畔)	大塚 (1956)			
		榊田 (1956)			
大分	中津市豊田町, 金湯水原池	木部 (1947)			以上

## 阿哲峽のニシキキンカメムシについて

風 早 保 男

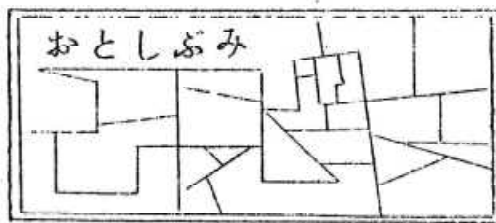
昨年5月3日の採集会に、阿哲峽鬼女洞附近（新見市法曾）に於てニシキキンカメムシ *Pecilocoris splendidulus* ESAKI が数頭採集されたことは『すずむし』 Vol. 6, No. 1 に若林正史君により、更に『新昆虫』 Vol. 9, No. 10 に『昆虫お国自慢—山陽の巻』の中にYOK氏によりそれぞれ報ぜられた通りであるが、今年の状態を探る機会を得たので報告する。

4月28日、他の用件で同地を訪れたのであるが、昨年と全く同じコースを30分ばかりで一巡したが、その間に成虫4、若虫3を得た。面白いことは昨年居た地点と全く同一地点で発見されたものが、3ヶ所もあったことで、ここでは昨年居たと記憶するところと殆ど1mも離れていないところであった。問題は其の食草であるが、この調査では明かにすることが出来なかった。鬼女洞の案内人に聞いてみると、この虫は数少いが以前から居る。これはカラムシのあるところでないに居ない、ということであるが、成程この附近にカラムシは多いが、カラムシとこの虫と深い関係があることには俄かに賛成しがたい。当日見たところでは、フジ、サクラ、キク科小草木その他で、一定しておらず明らかに汁を吸っているところは全然見なかった。成虫を得たところでは例外なく、近くに脱け殻があり、若虫は翌日及翌々日のうちに全部羽化したので、羽化のために移動していたのかも知れない。尚昨年場合はアベマキの樹幹からも一頭得られた。

次に5月14日に学校の遠足で再び訪れる機会を得たが、この日は筆者は全く目撃し得ず、僅かに生徒が一頭得たのみで、目的を達することが出来なかった。

以上の通り該種の生態について明かにすることは何も出来なかったが、細い山道を一巡しただけで上記の個体数を得たことと、昨年記録とから鬼女洞附近が一応安定した多産地であることだけは明かである。

おとしぶみ



タイリクアカネについて

本誌 Vol. 6, No. 3 (1956) 「作東の蜻蛉類」に於て本種 *Sympetrum striolatum*

*imitoides* BARTENEF について当地方から発見可能性のある旨記しておいたが、はからずも道信順氏により1956年6月19日苫田郡奥津村に於て1♂が採集され確実に分布することが判った。筆者も1954年及び1956年数回に亘り本種と思われる *Sympetrum* 属の一種を採集したが、同定に疑問が持たれ今日迄そのままに放置していたのであるが、前記小著脱稿後朝比奈正二郎氏より本種の未熟個体である旨同定をいただいた。採集した地点を記す次の如くである。

浅口郡金光町 1954. 6. 13 9♂♂3♀♀

浅口郡島方町 1954. 6. 13 1♂

岡山市金甲山 1956. 6. 10 1♂

いずれの産地に於ても羽化直後の個体で発生期は5月上旬～6月中旬頃と思われる、尚本種はアオアカネと同様な習性があるようで、羽化後山地帯への移動が行われるものようである\*。又分布については北海道から九州迄広く分布するが産地は断続的で北海道に多い外朝比奈氏によれば瀬戸内海沿岸地帯に多産する由である\*\*。最後に同定を賜った朝比奈正二郎氏に深謝の意を表します。

\* 阿波の自然 Vol. 2, No. 1 四国のトンボ類I) 中桑道夫

\*\* 朝比奈氏私信 筆者註 鳴門, 高松附近から中桑道夫氏の記録がある。

(安東 瑞夫)

#### 和氣でグンバイトンボの

#### 棲息を確認

岡山に於けるグンバイトンボ (*Platycnemis foliacea sasakii* Asahina) は和氣郡岡谷に於いて鈴木一郎 (博物之友 8巻56号(1908)) の記録があるのみで以来今日迄50年間記録がなく、又最近も採集されていない。このため再確認する事が望まれていた。

筆者は1957. VI-14 これを確認するため和氣へ出掛け和氣郡藤野附近一帯の吉井川支流に本種が棲息するのを発見し10♂♂, 2♀♀を採集した。

才華ながら採集に當って文献その他色々御教示頂いた安江先生に深謝します。

なお詳細は来号安江, 安東氏と共に記す予定です。【本報告のあとで和氣高校岡谷校舎安江先生がVI-30, VII-1の両日にわたり同校附

近で本種を採集された。——安江記)

(友野 良一)

#### 高梁市でアオサナエ

別稿の(採集メモ)の様に筆者は1957. V-27高梁市狐谷でアオサナエ *Nihonogomphus viridis* Oguma 1♂ を採集した。本種は比較的少い種なので一応報告する。(友野 良一)

#### オグマサナエの大量羽化

N-29 1957 正午頃, 岡山市東田町附近の西川沿いを通行中, 西川兩岸の高さ約2mの石垣に可成り広い範囲に亘って無数に止まり羽化中のオグマサナエ *Trigomphus ogumai* を発見した。この様な羽化は毎年この附近で見られるが(種名は今年始めて知った)面白い事には, 大量に羽化するの是一日丈でその前後数日に少数の羽化が見られるのみである。又西川附近, 岡山市街地でオグマサナエを見る事が出来るのは羽化後数日でその後は何処へ飛び去るのか殆んどお目に掛れない。(友野 良一)

#### 倉敷にゴイシシジミ

S 32. 5. 27 酒津港で *Taraka hamada* DRUCE ゴイシシジミが記録された。

国鉄バス矢掛行酒津港停留所から鉄道を渡って北側の草村にとまっていたのですぐ発見できた。その時なんの気なしに蝶の標本を整理しているどゴイシシジミの♂が標本してあるのに驚きました。この標本は1952. 5. 19にやはり黒田で採集したもので, これで♂♀の2個体が記録されたことになる。

本種は食虫性の蝶で幼虫はタケノアブラムシを食べて成育し成虫もアブラムシの分泌物をなめるといった奇妙な生活を営むことで知られている。

その後6月2日に小野洋先生が、6月16日には僕もその付近を調査したが発見する事ができなかったが今後ともに酒津港から黒田福山にかけてのコースは大いに期待できるのではないのでしょうか。

(尾崎 年彦)

#### 豪溪からトラフシジミ

5月3日若林正史君と筆者の長男知之との2人が総社市豪溪に採集を試みた際トラフシジミ *Papala arata* BREMER 1頭を得た。採集地点は豪溪天柱岩の少し上の方であった由。標本は筆者が保存している。県下の最南記録ではないかと思い報告する。

(風早 保男)

#### アオバセセリ金山にて捕獲

去る5月26日(1957)金山に採集に行き、頂山で採集中、何やらあまりにも早く飛ぶ小さい蝶がいた。もしやアオバセセリではないかと思つて苦心の末どらえてみると、期待にたがわずそうだった。他にも3・4頭飛んでいたがどらえられなかった。クモガタヒョウモンもたくさんおり、モンキアゲハも1・2頭見られた。頂上には花は咲きのこりの藤位なものだった。

(大森 登彦)

#### 和気のおオウラギンヒョウモンと

##### ウラゴマダラシジミ

筆者は1957、VI-14 グンバイトンボ採集に出向いた際、和気郡藤野、付近の金剛川川原で飛翔中のオオウラギンヒョウモン *Argymis lysippe* JANSON を多数目撃し一頭を採集した。本種は県北部には比較的多産するが南部には少く面白いと思う。

又、同所で飛翔中のウラゴマダラシジミ *Artopetes pryeri* MURRAY 一頭を目撃した。

なお同地は山相も道路も悪く好採集地とはいえない。

(友野 良一)

#### 今年のハルゼミの初鳴

1957年4月25日、倉敷市浅原へ出かけたが、付近の松林でハルゼミの声を聞くことができた。子供達の話では昨日(24日)から鳴いていたとのことであった。例年に比較して、発音が若干早めのようなのである。なお、それからは西坂付近に於いても、ほとんど継続して聞くことができた。

(小野 洋)

#### 金山の

##### ツマグロヒメコメツキモドキ

1956年7月27日、金山へ採集に行った際 *Anadastus praestus* CROUCH ツマグロヒ

メロメツキモドキ 1 Ex.を採集した。さして少 になっている。  
いものではないが、一応一産地として報告して  
おく。なお、本種の分布は本州、四国、九州と

(小野 洋)

\*\*\*\*\*

理化学器機 光学器機  
 度量衡 計量器 採集用具

平田光学器機店

岡山市中之町二七  
 電話 ㊟局 54 74

昆虫・植物採集用具  
 理化学器機

岡山市西中山下(柳川交叉点東)

永瀬教育堂  
 電話 ㊟ 4725 番

理 生物・地学標本模型  
 化学 昆虫採集用具  
 器 テレビ・ラジオ・真空管  
 機 島津製作所岡山県代理店

サカエ商会

倉敷市栄町(赤木病院西) 電話 91 3番

昆虫の月刊雑誌

北隆館 発行

新昆虫を覗みましょう!

倉敷市阿知町 TEL. 126 愛文社書店へ

----- 9 月採集会 御案内 -----

採集地 川上郡成羽(高粱よりバス利用)

日 時 9月22日(日)8.25 倉敷駅発  
 (雨天中止)

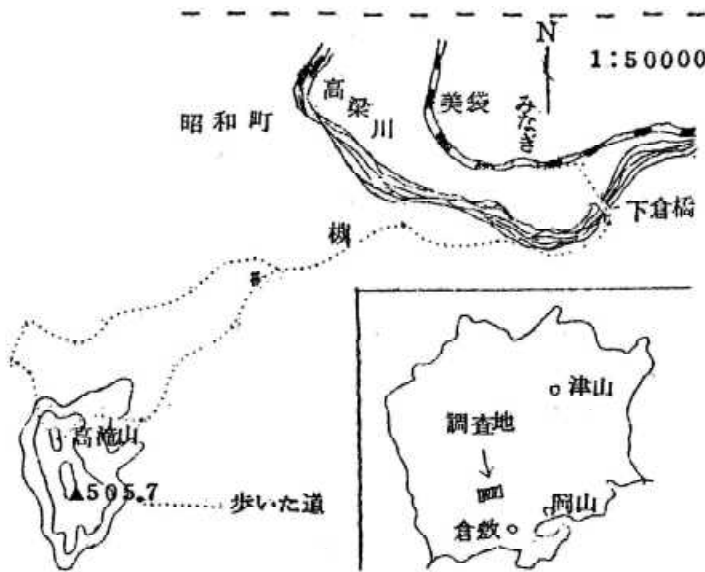
目 的 中生代三疊紀に属する化石の一  
 大宝库地帯、秋の昆虫探る



## 高滝山付近採集記

青野 孝昭

高梁川に沿って走る伯備線的美袋駅から西南方3 km あまりのところ標高505.7 mの高滝山が  
あって、付近には広葉樹が多く、昆虫相の面白そうな地域がある。1957年5月26日筆者は山手  
小6年の風早知之君や総社東中の生徒諸君とこの地域を歩いてみた。そして、低山地性の昆虫を比較  
的そろえている高滝山付近(吉備郡昭和町)を、倉敷方面からの手頃な採集地のように思った。



5月26日、3週間お  
りに快晴の日曜日を迎え、  
倉敷駅8時27分発の伯  
備線下り列車に乗る。美  
袋駅迄片道6.0円ナリ。  
同じ車籠に釣の一团が乗  
込んだので、つき竿を持  
つ筆者は隣人に誤解され  
る。西総社駅からどやど  
やと乗込んだ生徒のお陰  
でやっと自己流に納得ま  
れたらしい。苦笑したく  
なるような質問をしなぐ

なる。美袋駅に下車して勢ぞろいしてみると総勢14名、うち2名は植物が目的。それぞれ道具を出  
して装備する。さきの釣の一团もやはり楽しそうにはしやきながら装備している。倉敷工業高校の教  
員団だ。

美袋駅を後に南下、下倉橋を通過して高梁川を北から南へ渡り切ると、いよいよ採集適地となる。釣  
の一团は下倉橋の下手へ、我々は上手へ向って行動は別となる。下倉橋付近は特にアユ、ハエ漁に絶  
好の場所で、橋の上手一帯は禁漁区となり、入札によって狩漁権者が決められる。橋を渡り切って最  
初に目に入った蝶は遠目にはクモガタヒョウモンかと思われたキマダラヒカゲであった。川から吹く  
そよ風、目前の新緑、そして飛び交う昆虫連はすがすがしい初夏の季節感を満喫させてくれる。道の  
上を低くコチャパネセセリが飛び廻り、一方山の斜面にはコムシジカゆったりと舞う。突然黒いアゲ  
ハ蝶が前方から飛来して中学生の一团はにわかに興奮、白いネットが混乱する。やがて道の右手には  
川にかわって竹藪と荒地が続く。平坦な路上には相変わらずコチャパネセセリが多く、時々ダイミョウ  
セセリも出てくる。路傍にヤマノイモが少なからず自生していて、ここで彼等が育ってきたことが窺

像される。この道はアゲハ類の蝶道でもある。適当な間隔を置いてクロアゲハ、オナガアゲハ、カラスアゲハが前方から飛来する。その度に採集用の白いネットがどよめく。しかし、殆んど破損した蝶ばかりだ。モンキアゲハが目の前に現われたときは筆者も思わずネットを振るがモンキの方は入らず、一緒に飛んできたオナガアゲハが入る。左手の斜面にノグルミの急木が生えている。見事な樹林だと思っていると、秋山君がタカサゴシロカミキリをつかまえてくる。風早知之君はウツギの花からアオバセセリを手に入れる。ジャノメチョウ科ではヒメウラナミジャノメが断然目立ち、多くは飛び古したもののだが比較的新鮮な種でコジャノメが少なからず、また、クロヒカゲは全く新鮮な個体が発生している。ヒメジャノメ、ヒカゲチョウは見当らない。ツバメシジミとベニシジミも僅かに居るか吟すばらしい姿をしていて話にならない。いづどこへ行っても大抵いるホソヒラタアブとハナアブ5・6月頃しか見られないベッコウハナアブが目にとまる。忙しかった採集コースの両側が開けて、田畑となった頃、平井君が新鮮なモンキアゲハを手に入れる。道は90°左に曲って小川に沿って進むことになる。民家が5・60戸と川沿いに麦畑があって採集は閑散となる。このあたりは椋(ツグ)という部落である。小川にはカワトンボが多く、ダビドサナエ、ヤマサナエも少くない。岩佐君はミヤマカワトンボを入手。この小川に沿って上ると、その儘、高滝山北側の谷筋に入って行く。道端に薪が積んであり、ホタルカミキリとゴマフカミキリが1頭目にとまる。最先端の大山君はアオスジアゲハを捕獲。左に小さな神社を見ながら少し進んだところで小休止、そこでダイミョウセセリを又見る。このあたりから谷らしくなって、採集も忙しくなる。大きなホオノキがあってタイザンボクのような白い花をつけている。付近にはコナラが多く、アベマキも生育しているが、ナラガシワは殆んど見当らない。従ってセフィルス相は平凡かも知れない。ところどころ杉の人工林があり、わずかにヒノキも混っている。コミスジに混ってイチモンジチョウが飛んでいる。道はゆるやかな勾配を登り、両側に灌木の多いこの谷は採集コースとしては上の部だろう。放し飼いの牛に出会う。3頭いて1頭は頭に飼詰の空罐をぶら下げている。歩くとカランカランのんびりした音をたてる。ウツギの花へサカハチチョウ?が飛来したが、横からあわて者が裏返った儘のネットを突き出して逃がしてしまう。しばらく牛がついて来て大弱りだったが、いよいよ高滝山登頂コースに折れて、牛を振り切る。勾配は25°、そこから頂上迄250m程高さがある。道らしい道はなくなり、灌木の下をくぐり抜けて登るようになる。生徒の疲れも激しい。汗を出し、胸の動悸を高鳴らせながらやっと頂上にたどりついたのが12時15分、早速弁当を拡げる。クマバチが廻りを遵守し、クロメマトイは無遠慮に顔にまつわりつく。頂上は二つになり真の頂上は南側にあって岩場があるが、我々の休んだ一本松付近は灌木が茂って見晴らしは良くない。下りはコースをかえ、ゆるやかなコースを選んで東へ向って降りて行く。頂上から100mばかりはブナ科では殆んどコナラばかりだ。道は谷筋を降り、谷川にはカワトンボが目立つ。エゴノキが下向きの白い花をつけ花粉の黄色が砂で卵の黄味を連想させる。ホオノキがこの谷にもある。大きな葉と大きな花がきわ立っている。午後になったせいも蝶の姿は少ない。中腹に炭焼がまがあった。今日火入れをしたそうだ。費口が真赤な焰で沸かれ、炭焼男が火をかき廻している。山も麓に近く、くさむらにミヤマチャバネセセリを見付けてネットに入れる。登り道で左手にみた小さな神社を下りも左手にみて、ここで一服、今日の収穫を見せ合う。風早知之君の採集

品中にウラギンシジミ秋型1匹があったのには驚く。

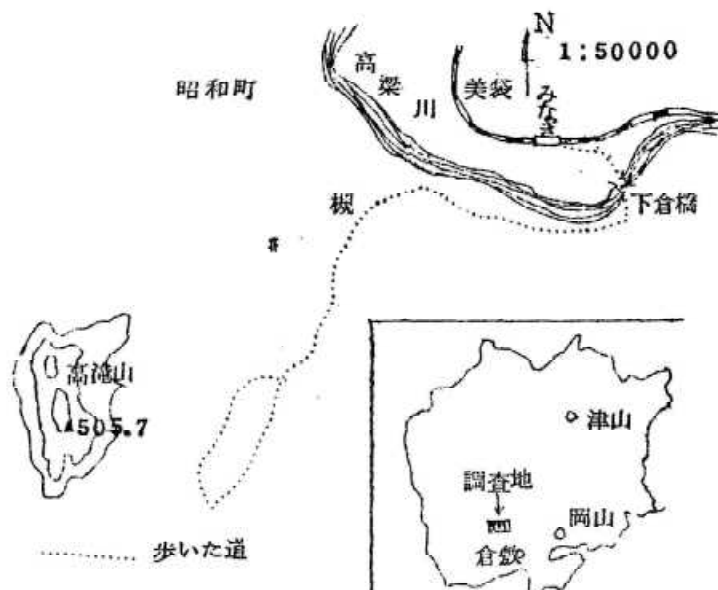
ここで筆者の管びんに入ったSyrphidaeは既に記した3種の外にエソコヒラタアブ、ナミホシヒラタアブ、ホソツヤヒラタアブ、マメヒラタアブ、ヤマトヒラタアブの5種、その他には、ツマジロカメムシ、モンキツノカメムシ、アカサシガメ、ヒメリンゴカミキリ、ベニカミキリ、ヘリグロベニカミキリ、クロハナカミキリ、シロオビナカボソタマムシ、クロハナムグリ等があるが種類という程のものは居ない。

道は元来た道と合し、もう機部落に入っている。行きかたに見た薪の木に今度はミドリカミキリ3番いが静止し、ホタルカミキリは沢山現われて活発に歩き廻っている。さすがにこの辺りへ来ると足は棒のようになっている。ところがモンキアゲハ飛来の報に生徒達の走ることに走ることに、100m程追いかけてとり逃がしてしまう。消防ポンプ小屋の外燈のわきにスジベニコケガがとまっていて動かない。知りのコースは午後のせいもあってか、虫影は午前程少なく、予定より短時間で歩いて、16時6分の上り列車にゆっくり間にあった。最後に今日の採集団で採集された蝶類を記録して置く。

ダイミョウセセリ11頭、アオバセセリ1頭、コチャバナセセリ14頭、ミヤマチャバナセセリ1頭、アオスジアゲハ3頭、アゲハ1頭、クロアゲハ5匹2♀、オナガアゲハ4匹3♀、カラスアゲハ2♀、モンキアゲハ1頭、スジグロシロチョウ1頭、モンキチョウ2頭、キチョウ5頭、ウラギンシジミ1匹、ベニシジミ2頭、ツバメシジミ1匹2♀、クモガタヒヨウモン2頭、イチモンジチョウ3頭、コムシジミ18頭、クロヒカゲ6頭、ヒメウチナミジャノメ6頭、コジャノメ5頭。

## 続高滝山付近採集記

青野 孝昭



労音6月例会で1日晩、チャイコフスキーの“くるみ割り人形”を見谷バレー団と関響の管弦楽で鑑賞、岡山から知りの車中で友野、若林両君と一緒に話ばかりはまらまら、2日の日曜日をもう一度高滝山方面採集にあてることに決まった。

6月2日、空に一点の青空も見られないが出発。美袋駅に立った3人の外に、今日も釣客が一人我々とまぎらわしい出立で降りて

く。長さ約200mの下倉橋を渡って前回と同じコースを進む。曇天の為かこの前程、昆虫は活動していないようだ。下倉橋を渡って、槻部落に至る迄の約1kmは、左に広葉樹の多い山が迫り、右に竹藪が続いて、恰好の採集コースになっている。今日は黒いアゲハ類は一度飛来したのみで、前回とまるで様相が違ふ。目新しいものでは素晴らしい飛翔を見せてくれるゴマダラチョウに胸がすき、真新しいヒメヤマダラセセリに夏を感じる。灌木からみずみずしいウラゴマダラジミを追い出した時は思わず慎重になる。想像通りウラゴマダラは発生期が他のゼフィルス類より早いようだ。この道で他にも1頭目撃したか樹上高く飛ぶのでつき竿もとどかず手が出ない。やがて若林君も1頭ネットに収める。クロヒカゲは発生数がうんと増加して次々に飛び出してくるが既に破損した個体もある。雌は少ない。コジャノメは鱗粉が少し薄れていて完全標本になるようなのは居ない。ここのコジャノメの中には後翅表第2室に斑紋のないものがある。コチャバネセセリは前回より減少していて、その後発生した個体の殆んどないことが想像されるがダイミョウセセリは数を減じていない。そして新鮮な個体が多い。

ウラゴマダラの居ることがわかってからはつき竿で灌木をたたきながら歩くので時間を食う。ウツギの花は未だ咲いていて、ベッコウハナアブらしいと思って訪花中の飛翔昆虫をネットに入れてみるとトラハナムグリだ。廻轉の斑紋が美しい。ふと上を見るとモンキアゲハが斜面をゆっくり降りてくる。しかし横へそれてその後をきたメスグロヒョウモンがに席をゆずり、モンキはネットに収まらなくてすんだ。メスグロも目新しい蝶だ。道は両側が朝けて槻部落に入る。小川に達して前回同様左に折れて川沿いに上って行く。川端のウツギへキタテハが2頭飛来し、島の畦にテングチョウが静止している。この2種も新しく発生したものだ。川沿いに500m程進むと、あまり目立たぬ雑貨商店があって、そこから川をはなれて左側へ入る。ここからは今日初めてのコースなので期待も大きい。この前帯りに通った谷筋よりも更に南の谷筋で、その儘西進すると鬼ガ折方面に抜けられる筈だ。この谷にはナラガシワ、アベマキが多い。土地の子供達が、昆虫採集を珍らしかってついてくる。ダイミョウセセリが多い。立派なクリ林がある。年長の子供が変な虫がとれたと言ってウマノオバチを持ってくる。長い尻尾が変った印象を与える。谷筋は次々と変化に富む。やや開けたところで又、ウラゴマダラを見つけたがネットはとどかない。蝶ではキマエアオジャク、ヒロバツバメアオジャク、アシベニカギバ、クロスジカギバ等が目立つ。クロヒカゲは相変わらず多く、今日見られるイチモンジチョウは敏達でなかなかネットに入らない。杉林の側にホソヒラタアブが多く、空中に静止している姿が目立つ。ヤマハナアブ、ベッコウハナアブもいたが今日はクロヒラタアブも入手。12時を廻ったので、ついて来た子供達を揃し、3人だけになって進む。弁当を払げる適当な場所がなく、も少し、も少しと登って行ったがどこ迄行っても峠に出ない。遂に道端へ腰をすえる。弁当も終り頃、今年初めての鳴雷を聞く。空の雲行きは次第にあやしく、13時5分降り始めた雨は夕立となって、我々はア

ベマキ林の下へ退避。ビニールをかぶってコーラスを始めたが、もう歌どころではなくなる。ひどい目にあったが夕立は30分間でピタリと上り、勇躍前進する。ところが道はぬかるみ、下草の露はズボンをごしゃぐしゃにぬらして、歩行は困難を極める。5万分の1地図を頼りに登っていたが、どうしたことか道がなくなり、行きづまってしまう。しかし引返すのも残念と、どろんこになりながらブッシュに突入、やっと峰を越えて南側に降りると直ぐ池があった。土地の人が三人釣をしている。コイが釣れるのだそうだ。若林君の絹製ネットは水を吸って用をなさない。池の堤防にホシツヤヒラタアブとエゾコヒラタアブを見る。はるか東北方に美袋の町をのぞみ、残り時間の少いことを気にしながら谷筋をどんどん下る。7.8mの高さをもつ広葉樹林下を歩くことが多いので、雨上りの曇天と相まってうっとうしい限り。ツマキヒラタアブがそんな中にいる。やがて、やや立派な山道に合流、よく見ると行きに登った道だ。クリ林を今度は右に見ながら機部沢に入ると、子供達が待っていて、大声で我々を呼んでいる。返事をするとタヌキはいらないかと言う。やがて荒縄でしばったタヌキを持って子供達は走ってきたが見ると既に死んでいる。今朝とれたのを殺したのだそうだ。持って帰れとしきりにすすめるのだが、奥くて汽車の中で壊がられても具合が悪いので、欲しいところだけのことわる。子供達には気の毒だったが、機部落もつきて、下倉橋に至る道を通る。やはりウラゴマダラがいたが夕方が近づいたせいか非常に活発に樹上を飛んで下りて来ない。今日は全部で6回目撃したが採集したのは2匹で、いずれも羽化したての新鮮なものだった。恐らく今日あたりが初発日に近く、これから次々と発生するものと思われる。2度目の採集行も終りに近づいたが、昆虫採集地としての高滝山付近は増々筆者に興味を抱かせるようだ。度々ここを訪れて昆虫を探ぐってみると面白い事実が出て来そうな気がする。最後に今日筆者が採集した蝶類を参考迄に記しておく。

ダイミョウセセリ5頭、ヒメキマダラセセリ3匹、コチャパネセセリ4頭、クロアゲハ1♀、キチョウ1匹、スジグロシロチョウ1♀、ウラゴマダラシジミ2匹、メスグロヒョウモン4匹、イチモンジチョウ1♀、コミスジ1♀、キタテハ2匹、コジャノメ2♀2♀、クロヒカゲ7匹1♀、キマダラヒカゲ1頭、テングチョウ1♀。

## 採 集 メ モ

友 野 良 一

### 1. 金 甲 山

V-14 1957金甲山へ登る。天候は曇り一時晴で北東の風強く三時頃俄雨あり。

「所感」 国立公園に指定され整備されつつある為、郡からのコースは道路等にも人手が入り幾分興味をそがれる。

「収獲」 フタスジサナエ、オグマサナエ、クロイトトンボ、クロスジギンヤンマ、シオヤトンボ、コジャノメ、クモガタヒョウモン。

「新コース」 知りは頂上より北に、地藏堂より西へ降りて八折町歌見へ至るコースを取ったが、樹相よく、又、ブドウ、夏ミカン等果樹もあり可成面白そうである。

## 2. 高梁市狐谷

V-27 1957午前9時すぎ高梁市出口へ着く、南へ入れば佐与谷、北へ行くと小坂部へ、その間の小さな谷が狐谷である。幅2~3m位の小溪流が流れ、水田があって農家が散在する。両側の山は入口付近には広葉樹が多いが入るに従って樹木が少なくなる。

谷へ入った所でアオサナエを押さえ悦に入る。天気も良く気持が良い少々歩いた所で土地の人に「何にやう取りよんですりゃあ」と聞かれ「昆虫だ」と答えると「何んのエサにするんですりゃあ」。これには恐れ入った。この人の話ではこの付近「蛇」が多く毎年“里”から蛇取りが来るとの事。成程その後2・3匹を見掛け、キモを冷やした。蛇にタラレタカ以後戦績振わず、ダビドサナエ、ヤマサナエ、シオヤトンボ、カワトンボ、ミヤマカワトンボなど駄種のみ多く、蝶類も余り具掛けず、谷の入口の出口より約一キロ半入った広葉樹の切れる辺りで道を右手に取り佐与谷へ越すコースを取った。このコースも余りバツせず時期になればヒョウモン類を望める程度？ 途中から悪路難行やっとの思いで尾根へ出る。1時すぎ山を下り佐与谷へ入ったが、前日の沙干狩で切った足の裏が痛みファイト半減、一キロ行かずしてピッコを引き引き、引き返した。クロアゲハ類多く、トンボは狐谷と大差なし。高梁発17.08の汽車で帰る。後記 お勧め出来かねます。

## 3. 高滝山村近

天気予報は曇りのち雨。V1-2 1957朝起きると薄曇で天気は何んとか持そうだった。宍野若林 両氏と共に美袋駅へ降りる。予定コースは、吉備郡昭和町槻から鬼ヶ岳へ抜けるコースを取り、高滝山を北西に見る辺りで南に入って、一つ南側の谷を引返す事になっていた。高梁川にかかった推定200mの下倉橋を渡った処で装備（若林氏はいつもの通り重装備）、その辺りからはやミヤマカワトンボ、クロアゲハ類、甲虫等豊富である。

槻から奥へ進むと谷は深く、樹相、山相共に良し、収獲は後記の通り普通種のみであったが、馬糞等もあって環境衛生仲々良く（珍類も望めそうである。）好採集地としてお勧め出来る。但しトンボは小川一本あるのみで多くは望めない。午後1時頃星食、以後→夕立→路を迷いブッシュ突破→ズブヌレ→道。と言う具合でその後意気全く上らず水の入った靴をはき、地図上どこに位置するのが判らぬままに東に向って下山、2~3キロ下ったのち元来た谷へ出る事が出来た。急いで降り17.25分美袋駅発の上りにやっと間に合った。

「採集品」ホソミオツネトンボ、フタスジサナエ、ダビドサナエ、ヤマサナエ、カワトンボ、ミヤマカワトンボ、シオヤトンボ、ショウジョウトンボ。

トラハナムグリ、イタドリハムシ、イチモンジハムシ、オオキイロマルノミハムシ、トホシオサゾウムシ、シラホシカミキリ、クロハナカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリ、アトモンサビカミキリ、ヘリドロベニカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、ヒメリンゴカミキリ、エグリトラカミキリ、ヨツボシカミキリ。

④ 炭焼用道路多く迷い易いので注意の事。



## 採 集 メ モ

青 野 孝 昭

## 1. 木野山→佐与谷→橋井→大久保→高梁

1957年4月7日 快晴。広瀬、水野両君とミヤコアオイ分布の有無を確める為に調査。カンアオイ類生育に好環境を与える杉林はあるが、歩いた範囲では遂にミヤコアオイの自生を認め得ず。しかし佐与谷橋を過ぎて100m程のところスジボソヤマキチョウ1♀を得たことは思わぬ収穫であった。後にも2回スジボソヤマキらしい蝶に出合ったが確認していない。木野山から佐与谷一帯にかけて、ミヤマセセリ、コツバメ、ルリシジミ、モンシロチョウが比較的多く、ツマキチョウは佐与谷で1♂を発見し捕えたのみ。越冬したものではテングチョウが断然ポピュラーで、なお、キチョウも普通。高梁麓に降りてからはルリタテハやヒオドシチョウも見。佐与谷の本場は竹の珍品が多いことで有名だが樹相及び溪流の景観から判断して、トンボ、ゼフィ、或は甲虫等の採集に適当な場所のように思われる。佐与谷から橋井方面に通ずる谷筋は、西側は暖帯林の様相を帯び常緑樹を多数混じえた広葉樹林となっているが、東側は平凡な赤松林に過ぎない。そして赤松地帯は橋井から、東方の大和方面迄続く、大久保峠には又、広葉樹林が現われるが、ここのは殆んどが落葉樹で、ゼフィルスにはいい場所かも知れない。

## 2. 真賀→星山→神庭の滝→勝山

1957年4月17日 曇後快晴。倉敷昆虫同好会第1回採集会に参加。真賀、星山間の山道で数頭のギフチョウを見る。風早知之君のみが1♂をネットに入れる。梅は散りかけ、ミツマタが満開。道の側に点々とミヤコアオイが自生している。カオドロクロハナアブが空中に多い。12時を少し廻って神庭の滝に到着。おびたしい群衆に何事かと思えば、大映のロケ隊が活躍し、見物の群衆が警官に整理されて見守っている。京マチ子、鶴田浩二主演の『地獄花』というカラービスタビジョンもの。こんな山の中を落下傘スタイルの娘がかつ歩する。滝の下で昼食後、スジボソヤマキチョウ1♂とギフチョウ1♂を網にする。キチョウ、コツバメ、ミヤマセセリも多く、越冬したものではテングチョウ、アカタテハを見る。間もなく大森氏もギフチョウ1頭を採集。午後2時。神庭の滝を後にする。

## 3. 神庭の滝

1957年5月14日。学校から遠足旅行として行く。この日、朝のうちは快晴だったが、神庭の滝付近に到着した12時頃から雨雲が空をおおい、神庭を引上げた午後1時半頃は雨となる。新緑の神庭はいつ来ても美しい。ウツギの花にアオバセセリを1頭みつけてネットに入れる。サカハチチョウ春型は比較的多く、やはりウツギの花に集る。5頭を採集する。シロチョウではスジグロシロチョウが断然圧倒的で、次がツマキチョウ、ツマキチョウを1頭ネットに入れてみたところ、鱗粉の薄くなった♂であった。期待していたウスバシロチョウはウツギの花で1頭みかけたがとり逃してしまう。カラスアゲハも多いが側へ寄りつかない。コチャバネセセリは1頭のみ活動。ツバメシジミはすっか

りいたんでいる。横田君にムカシヤンマを1頭貰う。

#### 4. 久保→兵坂峠→建部駅

1957年6月9日。快晴、安東、風早知之の両君と3人で歩く。兵坂峠にナラガシワは多いが、ゼフィにはなお早く、アカシジミ1頭とウラゴマダラシジミ1♂1♀をネットにしたのみ。新しいものではスジボソヤマキチョウ1♂、メスグロヒョウモン5♂、ヒメキマダラセセリ1♂、ヒカゲチョウ6♂をネットに入れる。この峠にはクロヒカゲは少く安東君が1頭見たのみ。ヒカゲチョウはすこく発生。その外、モンキチョウ、キチョウ、モンシロチョウ、イチモンジチョウ、ダイミョウセセリ、コチャバネセセリ、シルヴィアシジミを探り、ヒメウラナミジャノメ、キマダラヒカゲ、クモガタヒョウモン、アサマイチモンジ（風早君採）、キタテハ、テンダチョウ、ツバメシジミ、ルリシジミ、アゲハ夏型を見る。コチャバネセセリは汚損し、ダイミョウセセリは完全品と飛び古したのといふ。ヒメキマダラセセリは僅か、スジボソヤマキは安東君も1頭目撃。トンボではホソミオツネトンボが多く、アオサナエも少なからず見られた。

#### 5. 西草間→井倉

1957年6月25日。曇。井倉駅より10.00分発の中鉄バスで西草間迄、じくざく道を登る。西草間での収獲蝶は、キアゲハ1♂1♀、キチョウ2♂、スジグロチョウ1♂、ウラゴマダラシジミ2♀、ウラナミアカシジミ15♂7♀、ミズイロオナガシジミ4ex、ウスイロオナガシジミ1ex、オオミドリシジミ2♂、ヒロオビミドリシジミ1♀、ウラジロミドリシジミ3♂、ルリシジミ1♀、ミドリヒョウモン2♂、メスグロヒョウモン1♂2♀、ウスイロヒョウモンモドキ1♂、ヒョウモンモドキ4♂9♀、ルリタテハ1ex、ヒメヒカゲ1♂の17種で、ヒロオビミドリは昨年より50m程東寄りのナラガシワ葉上で新鮮な個体を入手。同地でウラジロミドリ、オオミドリも入手したが、ウラジロは新しく、オオミドリは既に古かった。ヒョウモンモドキは発生後期か♀が多く、産卵飛翔らしい飛び方をとり不活発。極めて極部的で一地点以外では全く見られなかった。発生地は昨年と同地である。交尾前抜中のもの、タムラソウの花へ訪花中のものも見る。ウラナミアカはアベマキ林に実に多い。最盛期と思われるが殆んど完全品ばかりだった。

他にダイミョウセセリ、ヘリグロチャバネセセリ、オオチャバネセセリ、スジボソヤマキチョウ、モンキチョウ、モンシロチョウ、ベニシジミ、ツバメシジミ、ウラギンヒョウモン、イチモンジチョウ、コミスジ、キタテハ、ヒオドシチョウ、アカタテハ、コムラサキ、ヒメウラナミジャノメ、ヒカゲチョウ、クロヒカゲ、キマダラヒカゲ、ヒメジャノメを目撃する。スジボソヤマキは1頭目撃したのみだが、とりそこねたところ、ぐんぐん上昇して視界から去った。周囲に杉林が茂っていた為かも知れない。井倉発4時31分の上り列車迄には時間の余裕があったので、崩りはバスに乗らず、はるか中国山脈を見渡しながら、V字形の峡谷を徒歩で降りる。バス道路がじくざくに大きく7回うねっていて、路傍には広葉樹の外、見はらしのさくところにはススキが多い。この道でホンチャバネセセリ1ex、ヘリグロチャバネセセリ6ex、ウラナミジャノメ3♂をネットにし、キマダラセセリ、ヒオドシチョウ、ヒメジャノメ等を目撃する。

— — — — —



## 昭和町日羽、美袋間の調査報告 及び高滝山付近の採集品目録

若林 正史

風早氏と日羽から美袋へぬける道を調査しようという事に話がきまって6月9日(日曜)に行った。コースは日羽から渡船で草田へ渡り、谷にそって登り、峠をこして東砂古へ出て美袋へ出るというコースであるが、蝶、甲虫共に少なく、頂上でウラナミアカシジミとダイミョウセセリを1頭ずつ見ただけであった。しかしテングチョウは多くいた。頂上付近から東砂古へ下る道にはかなりナラガシワの木もあったが時期が早いのか、それとも、元からいないのか、ゼフィルスはウラナミアカ1頭のみであった。下り道で牛ぐその中からオオフタホシマダコガネを1頭採った。それからは何にも採れず12時ごろに美袋へ着いた。日羽から美袋へ越えるコースはどうも採集には適さないように思う。余り早く美袋へ着いてしまったので、美袋から槻部落へ出るコースをたどったところ、かなり採れたので、主な目録と説明を記す。

### 蝶

ウラゴマダラシジミ 風早7頭、若林6頭

東中生徒(3人)8頭計21頭 行きは余り多く出なかったが帰りにみんなて網をカチ台せる位出た。全くの多産地である。

スジボソヤマキチョウ 総社東中(前田)1頭

クロヒカゲ 多数

コジャノメ 3~4頭見る

モンキアゲハ 1頭見る

ヒメキマダラセセリ 多し

ゼフィルス類はウラゴマダラの外1頭も見なかった。

### その他

トラハナムグリ 若林(3頭)風早(2頭)計5頭

ヒメトラハナムグリ 若林(2頭)風早(2頭)計4頭

クロハナムグリ 若林(1頭)

キスジトラカミキリ 若林(2頭)風早(2頭)計4頭

ラミーカミキリ 風早(5頭)

ゴマフカミキリ 若林(2頭)風早(3頭)計5頭

キンイロジョウカイ(体が紫色のもの)若林(1頭)

ベッコウヒラタシデムシ タスキの死がいの中に無数にいた。(ものすごくくさかった。)

アカスジキンカメムシ 若林(1頭)

-----

## “ 冬 眠 中 の 夢 ”

水 野 弘 造

冬季採集をやる勇氣も出ず、まんざら虫から遠ざかることも出来ぬ冬の三カ月の間は考えることも自然妙になって来るが、これもその一つである。しかし、もしこれが一般にうけたとなると一寸面白いことになるだろうと思って試みに発表する。たまたま先日、誰かの雑誌を読んでいたら、アメリカでは「競蛙」なる行事を行って有名になった町があるとか書いてあった。それを読んで自分の考えも案外実現性がないこともないと思うようになった。

そもそも地方公共団体がオートレースとか競馬とかで多額の金をまきあげる賭博を公然と許可している政府のやり方も変だが、その金で財政難を切り抜けているのだから世の中は便利なものだ。

そこで財政に悩む本昆虫同好会も法に触れない賭博を開催して「すずむし」の発行費を稼いだらというのである。勿論賭博とは言え昆虫同好会の名を持つ団体が主催する以上虫を使用するのである。已に日本でもクモを闘わせて遊ぶ所のあるのは御存知の通りだが、虫を闘わせるのは動物愛護の上から好ましくないからやはり何かの競争ということになる。まず考えられるのが競蛙の場合と同様、虫の幅跳び、高跳びである。ダイミョウバッタ等になるとずい分高く飛ぶし滞空時間も非常に長いから一寸面白そうだが、あまりに広い場所が必要し高さも測りにくい。だからバッタの類はあまり適当でない。その点、速を使わずに跳ぶコオロギの類は良かろうと思う。スズムシの音の良い種を交配させて夜店の売物にする位だからコオロギの競争をさせる様になった日にはその血統等をやかましく言って良く跳ぶ種をこしらえ上げるに違いない。(欧米ではノミの跳躍選手権試合をやるそうだからコオロギ等は已に経験済みかもしれないが。)特にカマドウマ等は良種とされることだろう。しかし何といっても競輪、競馬等賭博の対象はスピード競争であるから跳躍よりも競走の方がもうかるだろう。そこで思いついたのがオサムシを競走させることだ。虫の中で何か早いといつてオサムシ程早いものは一寸外にない。虫の競走に関する限り八百長等あろう筈もないからこれ程公明正大な賭博は無い。まず倉敷市と新聞社あたりの後援を得て鶴形山公園を会場とし、馬券を売る如く「虫券」を売る。(全国各地の同好会にも連絡して虫券販売所を全国に置くのである。)全国から集まった「虫主」や観衆の注目をあびる透明なビニール製の管をずらりと並べた競技場。勢ぞろいした選手オサムシのさん然たる色彩、青あり、黒あり、金緑色あり、紫あり……。行程は10米程でビニール管の一方を暗くし、そこにオサの好物カタツムリを用意し、ゴールとする。他方の口からオサムシを入れ電燈で照せば光を嫌うその虫は一方の暗所からカタツムリの臭のするのひかれてゴールに向かって突進する。出足よくリードしていたマイマイカブリが5米あたりから段々怪しくなりアレオアレオという間に一番後からノロノロと出て来たヤコンオサに追い抜かれたり、もう後20cm という所でトップを切っていたアオオサが突然くると後向きになって遂にゴールインしなかつたりスリル満点。興味深々たるものがあるに違いない。この珍らしい催しを放送せんとするラジオやテレビ。かくしてこの「競虫」

が全国に知れ渡り、それこそダービーそこのけの人気を得た日には倉敷市及倉敷昆虫同好会の名は一躍全国に知れ渡りその催しの利益によって本同好会会員は会費不要は勿論研究費もふんだんに得て、益々発展する。後援の新聞社も実に良いニュース種を得ることにより読者を獲得し、一石数鳥となるのである。 (終)

## 私 の 現 在

船 越 俊 平

日本特産ということ、大きさに表現すれば世界一と言えないこともありますまい。その世界一の蝶が、早春の日光を受けて、ぼつぼつ羽化を始めるのを子供の様にはしやきながら見ているのが私の現在です。

春の女神と言われるきふちょうも、うらかな陽春の中に美しい羽を得るまでには、暑い苦しい夏を過し、やっと涼しくなれば、やがて寒い冷たい霜と雪の中に三ヵ月、全く苦難の一年を経て来たことを考えれば、何かしら人生の教訓を与えられる様な気がします。

昨年春初めてネットに入れた時から、かんあおいに採卵し百十数頭のくま毛虫達を蛹化させるまでは、こちらも苦難をなめました。阿乱一ぱいの御馳走くらいかるく一日でべろり。どうにも仕方がないのであがりに近い或る土曜、家内が近郊の山へ行ってバケツにはいばかりのかんあおいを得てきて一安心………なのは毛虫達ばかり。スポンを着用するように言っておいたのにスカートのままで行ったからたまらない。体中ブトにやられ一日寝込んでしまいました。

私の昆虫採集は、蒐集欲を満足させるだけの趣味と自らを認じていましたが、事ここに至れば大いに逸脱、近隣からキ印と笑われる事と相成りました。それでも止す気はさらさらありません。又大なる苦難を求めて今年の計を案じています。

伊勢神宮のみかど、八日市のきまだらり、鈴鹿のセフィルス、中央アルプス行き、八ヶ岳登山等八ヶ岳は目下その資料蒐集に力を入れています。皆様御同行願えませんか。

濃尾平野を最高時速110kmで走る郊外電車の窓から、雲の如きアルプス望遠、雲をかぶる白銀の鈴鹿と伊吹を毎朝毎夕眺めては、今から心を躍らせています。 (受知県一宮市にて)

## 会 報

### 本会宛寄贈誌目録

北九州昆虫趣味の会誌7 (P. 24) : 1956、北九州昆虫趣味の会  
 日本蜻蛉文献目録 I 1890-1956 (P. 35) : 1957、蜻蛉同好会  
 駿河の昆虫 16 (P. 36) : 1956、静岡昆虫同好会  
 駿河の昆虫 17 (P. 31) : 1957、静岡昆虫同好会  
 静岡昆虫同好会ニュース 1 : 1957、静岡昆虫同好会

## 採集会報告

4月14日 真賀 → 神庭

朝少しばかり雨がぱらついたが、以後好天氣に恵まれ目ぼしいものも出沒、目的のギフチョウも若干採集できた。

参加者 宵野、赤枝、井手、大森、小野、風早、近藤<sup>光</sup>、清水、若林（以上会員）泉、風早<sup>知</sup>、近藤  
（弟）白神（母、兄、弟）、室山<sup>勝</sup>、室山<sup>真</sup>の諸氏17名(五十音順以下同じ)

6月9日 兵坂 純

ウラゴマダラシジミなどを採集したが、ゼフィルスにはまだ早いもようだった。

参加者 宵野、安東（以上会員）早風<sup>知</sup>の諸氏3名

6月16日 羅生 門

さして暑からずの好天で、ゼフィルスにはやや時期が早かったが、虫の姿はさすがに多く、殊にヒョウモンチョウ類はかなり沢山発生していた。ヨツボシサルハムシなど甲虫の収獲もなかなか多かつたし、アカシキンカメムシなども採集できた。

参加者 宵野、安東、小野、風早、河辺、友野、若林（以上会員）平井の諸氏8名

## — 編集後記 —

梅雨も明けていよいよ暑い夏！虫屋にとっては絶好のシーズンがやって来ました。皆さんは如何お過しですか。

本号を手にとって見て、その部の厚さに気付かれた事と思いますが一寸最近にないボリュームとなりました。又厚さ丈でなくその内容も素晴らしく全国的発表の価値のある様なものばかりです。トップは御多忙の安江先生に大変御無理を云って書いて頂いた貴重なもの。おとしふみも近来の庄巻でニシキンカメ、タイリクアカネ、ゴイシシジミ、グンバイトンボ、ウラゴマダラ、等々会員諸氏の活動の現われと云えましょう。それから本号から『採集メモ』という欄が出来ましたが、これは後から行く人の為に参考なる様会員間で便宜をはかろう、という様な趣旨で出来たものです。今後採集に行かれた時には一寸メモってどしどし投稿して下さい。

学生の皆さんは夏休を控えて、又各氏とも採集の計画をお持ちでしょうか夏の成果が次号に表われる様戦果をもれなく御投稿下さい。

すずむし 第7巻第2号	昭和32年8月1日 印刷
	昭和32年8月5日 発行
編集兼	岡山大学大原農業生物研究所
発行者	害虫部第2研究室内
	倉敷昆虫同好会
印刷所	倉敷市川西町南通り82 白洋社